

西田幾多郎博士作品を吟ずる

全国吟詠大会 指定吟題

① 秋家読書

独り坐せば寥々として『秋気涼し』
頭を案じ『巻を披けば感万長』
隙風来り襲えば『燈火乱れ』
明月『輝々として草堂を照す』

⑥ 湘南落日

青山『海に連なつて尽く 湖水』天に接して流る』
落日『煙雲の外 只富岳の浮ぶを見る』

② 秋郊聞笛

秋郊の風景は『眸裏に満ち』
寂寞『遙に聞く玉笛の声』
尤憶今宵『感慨多し』
笛声は『故郷の情を思うに中る』

⑧ 鎌倉雑詠

白砂青松
砂白く『松青々 海青く』波白々』
古城『山下の路 日々』往来となす』

③ 春園歩月

地上皓々として『霜踏むの如し』
夜深まりて『清く仙郷に遊ぶに似たり』
好哉春月『園を歩むの景』
一苑『東風に万樹香わし』

⑨ 愛宕山

愛宕山『入る日の如くあかあかと』
燃し尽くさん残れる命』(くりかえし)

④ 秋夜故郷を思う

夜風は『颯々として涼し』
明月の『白きこと霜の如し』
仰首『山月を望めば』
額を『ひくくして故郷を思う』

⑩ 吾死なば

吾死なば『故郷の山に埋れて』
昔語りし友を夢みむ』(くりかえし)

⑤ 無題

歲月『流水の如く』
又『春色新たなるに逢う』
寒梅『伴侶と成す』
天地『一問人』

⑫ 故里の

故里の『小川にあそぶわらべらの』
ぬなかことばもなつかしみ聞く』(くりかえし)

⑬ わが心

わが心『深き底あり喜も』
憂の波もどどかじと思う』(くりかえし)